

学びの連続性を踏まえたスタートカリキュラムについての一考察

味園 佳奈

A Study on Start Curriculum Based on the Continuity of Learning

Kana Misono

小学校学習指導要領が改訂され、2020年度から全面实施となった。今回の改訂において、幼児期における遊びを通した総合的な学びから主体的に自己を発揮しながらより自覚的な学びに向かうことが可能となるようにすることが新たに示され、生活科を中心とした「スタートカリキュラム」の充実がこれまで以上に求められている。そこで本稿では、幼児期と児童期の学びについて整理し、生活科「学校探検をしよう」を中心としたスタートカリキュラムの単元を構想し、著者が行った実践をもとにスタートカリキュラムがもたらす効果と今後の在り方について追究した。その結果、子どもの思考の流れに沿った学習展開が可能となり、学習成果を上げていることが分かった。その一方で、子ども一人一人の気付きを自覚化できるような手立てが必要であることや、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」との関連を図っていくこと、幼稚園・保育所・認定こども園等と小学校との相互理解を図っていくことが今後の課題であることが明らかとなった。

Key Words: [学びの連続性] [スタートカリキュラム] [接続期] [生活科]
[幼児期の学び]

(Received October 24, 2023)

I はじめに

スタートカリキュラムとは、小学校へ入学した子どもが幼稚園・保育所・認定こども園などの遊びや生活を通した学びと育ちを基礎として、主体的に自己を発揮し、新しい学校生活を創り出していくためのカリキュラムのことである。

小学校学習指導要領が改訂され、2020年度から全面实施となった。今回の改訂では、「生きる力」をより具現化し、教育課程全体で育成を目指す資質・能力を「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の3つの柱で再整理されている。また、幼稚園教育要領や幼保連携型認定こども園教育・保育要領、保育所保育指針（以下「幼稚園教育要領等」）に基づく幼児期における遊びを通した総合的な学びから他教科等における学習に円滑に移行し、主体的に自己を発揮しながら、より自覚的な学びに向かうことが可能となるように

* 鹿児島純心女子短期大学生活学科こども学専攻（〒890-8525 鹿児島市唐湊4丁目22番1号）

することが新たに示された。小学校入学当初における生活科を中心とした「スタートカリキュラム」の充実がこれまで以上に求められていると言える。

Ⅱ なぜスタートカリキュラムなのか

これまでも生活科では、幼児との交流活動や他教科等との関連を図る指導が行われてきており、小学校入門期においても、小学校生活に円滑に適応できるように、他教科等との関連を図りながら指導の工夫がされてきている。それなのに、なぜ、今頃スタートカリキュラムなのか。2015年2月に文部科学省国立教育政策研究所教育課程センターが「スタートカリキュラム スタートブック」を作成した。そこには総合的に学ぶ幼児期の教育の成果を小学校生活に生かしていくことで、生活科における学習活動が他の教科等での学習材となったり、他教科等で身に付けた技能が生活科において発揮されたりして、一層の学習効果が期待できると記されている。具体的には、その理由について以下の3点が挙げられている。

1つ目は、安心して小学校で過ごせるようにしていくためである。4月、小学校に入学してきた子どもたちは期待と同時に不安も抱いている。スタートカリキュラムを編成するに当たり、幼児期に慣れ親しんだ活動を取り入れたり、学びやすい環境を作ったりすることで、安心して小学校でも過ごせるようになる。また、先生や友達と関わる活動を取り入れることで、出会いの喜びや小学校の面白さを感じることができる。こうした安心や楽しさは子どもにとって大きな生活の支えとなり、小1プロブレム等の予防や解決にもつながると言える。

2つ目は、自信をもって成長することができるようにするためである。入学してきた子どもたちは、幼稚園・保育所・認定こども園等で年長児として様々な場面で活躍してきている。遊びを通して試したり、工夫したり、友達と力を合わせて何かを成し遂げたり、自分の考えを伝えたり、友達の話を聞いたりするなど、数多くの経験をしているのである。スタートカリキュラムにおいて幼児期の学びと育ちを生かす活動を取り入れることで、自信をもって活動し、自己発揮することが可能となる。こうした姿を先生や友達に認められることで、自己肯定感が生まれ、よりよく成長していくことができる。

3つ目は、自立につながるようにしていくためである。子どもたちは、遊びを通して幼児期に「学習上の自立」「生活上の自立」「精神的な自立」につながる経験をしてきている。生活科を中心としたスタートカリキュラムを編成することで、子ども主体の学習活動を展開することが可能となる。短期的な入学直後の適応を目指すだけでなく、自立し生活を豊かにしていく教育活動として位置付けることで、子どもたちは自分で考え、判断し、行動することを繰り返し、自立に向けて歩んでいくことになる。

Ⅲ 幼児期の学びと児童期の学びと幼児期の終わりにまで育ってほしい姿

2010年3月に「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議」が開催され、同年11月に「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告）」がまとめられた。報告書は教育活動では幼児期、児童期（低学年）の発達の特性を踏まえ、

「学びの芽生え」, 「自覚的な学び」さらにその円滑な移行を次のように捉えている。

児童期は「自覚的な学び」の時期である。児童期の教育は各教科等の学習内容について授業を通して学んでいく。また、そこには学ぶことについての意識があり、集中する時間とそうでない時間（休み時間等）の区別がつき、自分の課題に向けて、計画的に学んでいく。例えば、国語科の授業を例にすると、漢字を「1年生ではこれだけ覚えましょう」というように、覚える内容があらかじめ決められている。子どもたちは、その課題をどのように解決し、日頃の生活の中でどう活用していくかが求められる。

幼児期は「学びの芽生え」を培う時期である。幼児期には、子ども自身が自発的・能動的に環境と関わりながら、生活の中で状況と関連付けて身に付けていくことが重要である。したがって、生活に必要な能力や態度などの獲得のためには、遊びを中心とした生活の中で、子ども自身が自らの生活と関連付けながら好奇心を抱くこと、あるいは必要感をもつことが重要となる。具体的には、楽しいことや好きなことに集中することを通して、様々なことを学んでいく。また、遊びを中心として頭と心と体を動かして様々な「人・もの・こと」と直接関わりながら、総合的に学んでいくのである。

幼児期から児童期にかけての時期は、「学びの芽生え」から次第に「自覚的な学び」へと発展していく時期であり、「学びの芽生え」と「自覚的な学び」の両者の調和のとれた教育を展開する必要がある。例えば、幼児期の教育においては、調べる、比べる、尋ねる、協同するなどの様々な手法を組み合わせて楽しみながら課題を解決する取組を通じて、「学びの芽生え」から自覚的に学ぶ意識へとつながっていくような活動の展開が求められる。一方、児童期の教育においては「自覚的な学び」の確立を図るとともに、楽しいことや好きなことに没頭する中で生じた驚きや発見を大切に、学ぶ意欲を育てるといった活動を適宜取り入れることが必要である。

幼児期の育ちの見えにくさを払拭するために、幼稚園教育要領等の改訂では新たに「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として10の姿を具体的に示している。これは「学びの芽生え」から「自覚的な学び」へと発展していく段階において見られる子どもの具体的な姿を明確化したものであり、小学校教育へとつなぐ重要な役割を担うものと期待されている。

幼児期の教育においては、子どもの自発的な活動としての遊びを中心とした生活を通して、一人一人に応じた総合的な指導が行われている。幼児期は子どもたちが遊び展開する中に様々な学びがあり、子どもたちは遊びを通じて心を揺り動かされ、感動を味わったり、ときには上手くいかなくて涙を流したりするなど様々な経験をしている。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」とは、生きる力の基礎を育むため3つの資質・能力（「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」）が育まれ

- (1) 健康な心と体
- (2) 自立心
- (3) 協同性
- (4) 道徳性・規範意識の芽生え
- (5) 社会生活との関わり
- (6) 思考力の芽生え
- (7) 自然との関わり・生命尊重
- (8) 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚
- (9) 言葉による伝え合い
- (10) 豊かな感性と表現

表1 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

ている子どもの小学校就学時の姿である。5領域のねらい及び内容に基づいて、幼児期にふさわしい遊びや生活を積み重ねることにより、幼児期の教育において育まれている具体的な姿と言えよう。こうした子どもの具体的な育ちを踏まえ、児童期の教育課程につなげたい。

Ⅳ スタートカリキュラムの実際

1 基本的な考え方について

幼児期の教育は5領域の内容を遊びや生活を通して総合的に学んでいく教育課程等に基づいて実施され、児童期の教育は各教科等の学習内容を系統的に配列した教育課程に基づいて実施されている。ここに幼児期の教育と児童期の教育の大きな違いがあることは前述の通りである。

そこで小学校に入学した子どもたちが、幼稚園・保育所・認定こども園等において遊びや生活を通じた学びと育ちを基礎として、よりよく自己を発揮し、新しい学校生活を創り出していくためのカリキュラムが必要となるのである。学びの芽生えと自覚的な学びをつなぐものとして、生活科を中心として楽しいことや好きなことに没頭する中で生じた気付きを大切にしたカリキュラムとなるようにすることが必要である。

スタートカリキュラムを実践するにあたり、以下の3点を基本として職員間で共通理解を図り、カリキュラムの編成及び実践することにした。

(1) 子ども一人一人の実態を踏まえること

入学当初の子どもの発達には個人差が大きく、きめ細やかな指導が求められる。そのためにも、幼稚園・保育所・こども園等への訪問し子どもの姿や保育者の環境構成、関わり方を観察したり、必要に応じて教職員との意見交換を行ったり、要録や個別の指導計画等を見たりするなどして子ども一人一人の子どもの実態を踏まえた上でスタートカリキュラムを編成する。

(2) 子どもの発達の特性を踏まえること

入学当初の子どもは、教科や鉛筆を使う学習にあこがれをもっている一方で、長い時間じっと椅子に座って学習することは経験がなく、身体全体を使って学ぶという特性がある。そうした発達の特性を踏まえ、弾力的な時間割の設定を行ったり、学習活動・学習形態を工夫したりする。

(3) 生活科と中心とした合科的・関連的な指導の充実を図ること

様々な「人・もの・こと」と関わりながら、総合的に学ぶ幼児期の子どもの発達の特性を踏まえ、生活科を中心とした合科的・関連的な指導の充実を図る。例えば、生活科「学校探検をしよう」を中心に国語科や音楽科、図画工作科、学級活動等の内容と合科的に扱い、大単元を構成することで、子ども一人一人の思いや願いに寄り添いながら、ゆったりとした時間の中で進めていくことが可能となる。

(4) 子どもが安心して学べる学習環境を構成すること

幼児期は「環境を通して行う教育」を基本としており、保育者の意図的・計画的な援助のもと、子どもが自分の力で生活を創っていくことができるよう環境を構成している。子どもが安心感をもち、自分の力で学校生活を過ごせるように子どもの学習環境を見直す。

2 実践例

子どもたちが幼児期に体験してきた遊び的要素とこれからの小学校生活の中心をなす教科学習の要素を両方組み合わせ合わせた合科的・関連的な学習プログラムをどう展開していくかが、主体的に活動していくことを保障し円滑な接続を図って行く上で重要な鍵となる。そこで、生活科を中心とした大単元を構想したり、週のねらいを設定し指導計画や教材、授業形態等の工夫をしたりすることによって、「できた」「分かった」という自己実現の機会をふんだんに与え、気付きの質をより高めていくことができるよう工夫を行った。

2014年4月K県R小学校において実施したスタートカリキュラムの実践について紹介する。

(1) 研究の対象

K県R小学校第1学年

(2) 研究の方法

小学校入門期の子どもにとってノート等に文字を書いて記録することは困難であるため、子どもの変容を見取るために子どもが発した言葉や表情、感想等をもとに考察していく。

(3) 実施期間

4月の入学式からゴールデンウィーク明けまでの約1か月間

(4) スタートカリキュラムの単元構想

生活科「学校探検をしよう」を中心に他教科等の内容と合科的・関連的に扱い、大単元を構成することで、子どもに寄り添いながら活動を展開していくことができる。そこで、子どもの思考の流れを意識しながら、生活科「学校探検をしよう」を中心に図1のような単元構想を行った。各教科等との関連を記すことで、合科的・関連的な指導が効果的に展開できるように工夫した。

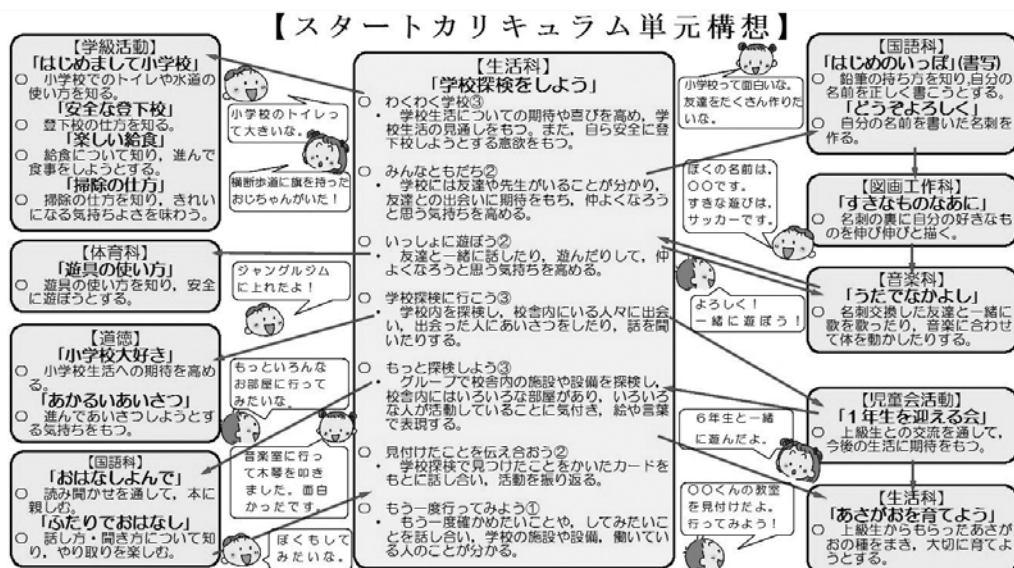


図1 スタートカリキュラム単元構想

(5) 週のテーマとねらいの設定

小学校教育においては各教科等の目標が設定され45分間の授業が展開されるが、子どもたちが安心して小学校で過ごせること、自信をもって成長していくこと、自立し生活をよりよく創っていくことを願って、幼児期の教育と同様、週のねらいとテーマを表2のように設定し教育活動を行うことにした。学習の場が自分の身の回りからクラス全体へ、クラス全体から学年全体へ、学年全体から学校全体へと徐々に広がるように工夫した。

第1週	はじめましてしょうがっこう ○ 学校での生活の仕方を知ったり、みんなで学校探検をしたりして安心して過ごす。
第2週	はじめましてともだち ○ 学校での生活の仕方を知ったり、みんなで学校探検をしたりして安心して過ごす。
第3週	わくわくがいっぱい ○ 友達との交流を中心とした学習活動や上級生とのふれあい等を通して、対象への気付きを上げる。
第4週	しょうがっこうだいすき ○ 学習の場を広げていくことにより、対象への気付きを高め、これからの小学校生活に期待をもつ。

表2 週のテーマとねらい

(6) 展開

幼児期の教育・保育は週のねらいが立てられ、子どもの生活の流れに合わせて遊びを中心とした活動が展開される。また、子どもたちの興味・関心に基づき教育・保育が展開されることから、意図的・計画的な環境構成のもと、保育を展開する際には子どもたちの姿に基づき柔軟性が求められる。このことを踏まえ、スタートカリキュラムの展開に当たっては、幼児期の教育・保育同様、週のねらいを立て、時間割を弾力的に運用し子どもたちの興味・関心に基づいた活動ができるように努めた。

以下は週のねらいごとに授業形態や教材、指導・援助の工夫について述べていく。

ア 第1週 はじめましてしょうがっこう
第1週は「学校での生活の仕方を知ったり、みんなで学校探検をしたりして安心して過ごす」ことをねらいとした。入学式を迎え子どもたちは、小学生になった喜びを味わう一方で、新たな環境へ不安ももっているのではないかと考えた。

そこでまず、時間割表を右の図（図2）のように工夫した。1単位時間の区切

期日		教種・教種(室種)の使い方	プリントのたたみ方	おはなしよんで	おはなしよんで
1	○学校・担任の名前 ○元気のいい返事	音楽・国語	音楽・国語	国語	生活
		○うたでなかよし ○おはなしよんで ○教科書の使い方	○うたでなかよし ○おはなしよんで ○教科書の使い方	はる どうぞよろしく	学校探検に行こう (図書室・算数室 音楽室・体育館)
2	学校行事	学級活動	生活	算数	学校行事
	入学式	はじめまして小学校(トイレ・水道の使い方)	学校探検に行こう (各教室・校長室 保健室・校庭)	しまたんけん 生活科との関連	身体計測 視力検査
3	学級活動	学級活動	生活	学校行事	体育
	ようこそ小学校へ	安全な登下校	一緒に遊ぼう!	交通安全教室	遊具の使い方 整列の仕方 生活科との関連
4		下校指導	学級活動	道徳	算数
			たのしい給食	たのしい学校 生活科との関連	しまたんけん 生活科との関連
5		下校指導	学級活動	学級活動	学級活動
			家庭学習の仕方	掃除の仕方	
				下校指導	下校指導

図2 第1週の時間割表

りを点線で記し、弾力的な運用を図っていくことで子どもの姿に寄り添いながら生活が流れることを意識できるようにした。小学校教員が日頃活用している時間割表をもとに作成することで、はじめてスタートカリキュラムに取り組む教員自身も安心して展開できるようにするとともに、授業時数もカウントすることがしやすいようにした。

具体的な活動としては、登校してきた子どもたち一人一人に丁寧に関わるようにし、ランドセルや上履きなど学用品の始末の仕方を確認した。(図3) また、授業形態を工夫して学年全体での活動(図4)を取り入れ、学校生活の仕方(登校してすること、水道やトイレの使い方、机・引き出し・椅子の使い方等)を伝える活動を行った。その際、導入で子どもたちが幼児期に慣れ親しんできた歌を歌ったり、指遊び等をしたりするなど、子どもたちが安心して過ごせるように配慮した。そして、これまで年長児として活躍してきた経験を踏まえ、給食の当番活動や教室の掃除等「自分ことを自分でする」姿を認め、ほめ励ましていくよう努めた。



図3 学用品の確認



図4 授業形態の工夫

生活科「学校探検をしよう」では、右の図(図5)のように全員で一緒に各教室を探検して、上級生の学習の様子を見たり、担任をはじめ、校長や養護教諭と交流したりして、小学校での基本的な生活の仕方を理解するとともに、上級生が学習している姿を見て、「早く勉強したい」「たし算って知っているよ」という声も聞かれた。この姿から学習することに対する憧れを感じた。ただ、45分間座って学習することはこれまでゆったりとした時間の流れの中で生活してきた子どもたちにとって戸惑いの一つになるのではないかと感じたため、1単位時間を弾力的に運用して、国語科や算数科等の学習も行うようにした。



図5 学校探検の様子

イ 第2週 はじめましてともだち

第2週は「友達との交流を中心とした学習活動を通して、友達と仲良くなるとともに小学校生活のリズムをつかむ」ことをねらいとした。

小学校での生活の仕方が少しずつ分かるようになり、新しく出会った友達と一緒に遊ぶ姿も見られるようになってきたため、時間割表は図6のように子どもの生活の流れがスムーズに流れるよう各科目の関連を図りながら設定した。また、クラスの友達と一緒にする活動を多く取

科目	おはなしよんで	おはなしよんで	おはなしよんで	おはなしよんで	児童集会
1	音楽・国語 ○うたでさんぽ ○うたにあわせて あいうえお	音楽・国語 ○うたでさんぽ ○うたにあわせて あいうえお	算数 10までのかず と 生活科との関連	国語 うたにあわせてあ いうえお と 生活科との関連	国語 うたにあわせてあ いうえお と 生活科との関連
2	体育 保健ぐしの運動	国語 うたにあわせてあ いうえお と 生活科との関連	国語 うたにあわせてあ いうえお と 生活科との関連	道徳 あかるいあいさつ と 生活科との関連	算数 10までのかず と 生活科との関連
3	学校行事 心臓検診	算数 10までのかず と 生活科との関連	体育 保健ぐしの運動	図工 すまものなかに と 生活科との関連	体育 保健ぐしの運動
4	算数 10までのかず と 生活科との関連	国語 おはなしよんで (国書館の使い方・ 本の借り方・返し 方) と 生活科との関連	国語(書写) はじめのいっぽ 字を書く姿勢	生活・音楽 と 生活科との関連	生活・音楽 ○みんなともだち ○うたでさんぽ
5	下校後 つながりがし と 生活科との関連	学校行事 学年活動	生活 みんなともだち 一緒に遊ぼう	生活・音楽 と 生活科との関連	生活・音楽 ○みんなともだち ○うたでさんぽ
	下校後	下校後	下校後	下校後	下校後

図6 第2週の時間割表

り入れるようにし、生活科「学校探検をしよう」や音楽科「うたでさんぽ」、国語科「うたにあわせてあいうえお」等、各科目を合科的に扱う工夫も行った。2週目になると休み時間になると入学して初めて出会った友達を遊びに誘ったり、名前を呼んだりする姿からもっと仲良くなりたいという気持ちの高まりを感じた。このような子どもの実態を踏まえ、友達とのつながりが生まれるような言葉を掛けたり、もっと学級の友達と仲良くなるためにはどうすればいいか問いかけたりするなどして主体的な活動を促した。

具体的には、右の図（図7・8）のように生活科「学校探検をしよう」と音楽科「うたでさんぽ」を合科的に扱い、その中で友達と名刺交換したり、音楽に合わせて体を動かしたりするなどして友達とのつながりが生まれるように工夫した。



図7・8 生活科と音楽科の合科的授業

また、この時間は授業参観として保護者等にも公開し、子どもたちが小学校に入学してどのように過ごしているのか、友達と上手に関わることができているのか、先生の話を最後まで聞くことができているのか等といった保護者自身の不安が少しでも解消する機会となることや小学校教育及び、スタートカリキュラムへの理解にもつながる機会となるよう工夫した。そして図9のように2週目には当番活動も取り入れた。理由は幼稚園や保育所等で子どもたちは当番活動等を全員が経験しており、年長児として園生活で活躍してきた実態があったからである。それぞれの出身園で取り組み内容は異なるものの、自分が経験してきたことをクラス共通理解を図った。友達と一緒に号令を掛けたり朝の会等の進行をしたりする様子を見守り、必要に応じて声を掛けたり



図9 日直の活動

りみんなで話し合ったりするなどして関わり、子どもたちが自分たちの生活を自分たちで考えて作りそのことが自信へとつながるように心掛けた。

ウ 第3週 わくわくがいっぱい

クラスの友達の名前を徐々に覚えはじめ、休み時間に誘い合って遊ぶ姿が見られるようになってきた。こうした子どもの姿を踏まえ時間割表の1単位時間の区切りも実線で記し、45分間の授業を徐々に取り入れていくようにした。（図10）

また、友達と一緒に遊ぶ中で、「お兄ちゃんの先生と会ったよ」「本がたくさんある

時	おはなしよんで	仲良く体育	さんすうタイム	おはなしよんで	おはなしよんで
1	国語 うたにあわせてあいうえお	国語 うたにあわせてあいうえお	算数 10までのかず	国語 うたにあわせてあいうえお	国語 うたにあわせてあいうえお
2	体育	国語	学校行事	音楽	学校行事
3	固定遊具を使った運動遊び	○うたにあわせてあいうえお ○おはなしよんで	聴力検査	うたでなかよしになろう 生活科との関連	耳鼻咽喉科検診
4	算数	音楽	体育	児童会活動	体育
5	10までのかず	うたでなかよしになろう	固定遊具を使った運動遊び	1年生を迎える会 生活科・音楽科との関連	固定遊具を使った運動遊び 生活科との関連
6	学級活動	算数	国語	生活	算数
7	係をきめよう	10までのかず	うたにあわせてあいうえお	学校探検をしよう	10までのかず
8	下校指導	下校指導	生活	下校指導	園工
9			いっしょに遊ぶ		かたちやいろをたのしもう
10			下校指導		下校指導

図10 第3週の時間割表

「お部屋があったよ」等の声が聞かれ、子どもたちにとって新しい発見も数多くあったようだ。

そこで、第3週は「友達との交流を中心とした学習活動や上級生のとのふれあい等を通して、対象への気付きを広げる」ことをねらいとした。その際、主体的な活動となるよう、子ども一人一人の気付きに寄り添いながら行っていくことに留意した。

具体的には、担任が日頃から黒板を消したり、花に水を掛けたりしていると、「ほくもやりたいな」「私にもできるよ」という声が聞かれるようになってきた。そこで、学級活動「係をきめよう」において、どんな係があったらいいか、みんなが気持ちよく過ごせるか話し合い、一人一人の係を決めていくようにした。また、児童会活動「一年生を迎える会」においては、「上級生にお礼の歌を歌いたい」「もらったプレゼントを見たい」等といった子どもの姿に寄り添い、下の図のように事前の活動として2時間目に音楽科「うたのなかよし」の中で音楽に親しみながらお礼の歌の練習をする時間（図11-1）や、事後の活動として生活科「学校探検をしよう」で時間に上級生からのプレゼントを見たり、手紙を読んだりする時間を確保し、これからの小学校生活へ期待が高まることを期待し、工夫を行った。（図11-3）



図11-1 事前の活動



図11-2 一年生を迎える会



図11-3 事後の活動

エ 第4週 しょうがつこうだいすき

「小学校っていろんな人たちがいるんだな」「教室もたくさんあるぞ」「もっと探検したい」等の言葉が聞かれるようになり、子どもの知的欲求の高まりを感じた。そこで、第4週は「学習の場を広げていくことにより、対象への気付きを高め、これからの小学校生活に期待をもつ」ことをねらいとし、生活科「学校探検をしよう」においてはグループで学校探検する活動を取り入れた。（図12）

グループでの活動を取り入れることにより、子どもたちの自主的・自発的な活動の展開が期待できる。学校探検をして出会った人や各教室の位置関係が分かるよ

曜日	活動	仲間し音楽		おはなしよん	生活	憲法記念日
		国語	算数			
1	昭和の日	ふたりでおはなし	10までのかず	もっと学校探検をしよう		
2		国語	国語			
3		おはなしよん	ふたりでおはなし			
4		算数	体育			
5		10までのかず	こていゆうぐをつかったうんどう！生活科との関連			
		音楽	図工			
		うたでなかよしになろう	おひさまにこにこ			
		下校指導	下校指導	下校指導		

図12 第4週の時間割表

うに学校内の地図を掲示しておくことで、より主体的な学習活動ができるように工夫した。(図13-1) また、事前に各教室や遊具等にシールを用意しておき、学校探検中に記録用紙にそのシールを貼るといった遊びの要素を取り入れ、自分たちで探検できた喜びが味わえるようにするとともに、これからの生活に期待に意欲がもてる機会となるよう工夫した。(図13-2)

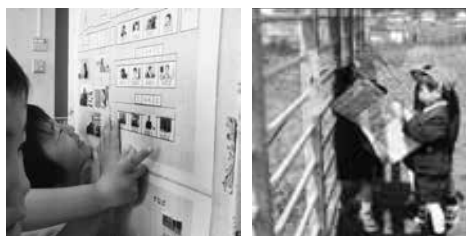


図 13-1・13-2 教材等の工夫

右の図(図14)は学校探検で学校長と交流している様子である。「名前は何ですか」「どんな仕事をしているのですか」等、グループの友達と協力して質問し、交流する姿が見られた。学校探検を通して担任だけでなく、他の教員や職員と交流することで、人と関わる楽しさはもとより、自分たちで様々なところへ探検し、「人」「もの」「こと」との出会いや発見があったことが自信となるよう十分な時間を確保した。



図14 校長先生との関わり

学校探検の事後には右の図(図15)のように見付けたことを絵や言葉でかく活動を取り入れ、一人一人の気づきを共感的に受け止めるようにした。



図15 子どもの気づき

ただ、この活動は授業時間中に他の教室に入ったり、他の教室をのぞいたりするため、事前に全職員へ共通理解を図っておいた。また、授業時間中であるため、誰とでも気軽に話ができたり、交流できたりするとは限らない。子どもたちには休み時間も学校探検が可能であることを伝えておいた。

V 結果と考察

本実践の成果としては、子どもの思考の流れに沿ったスタートカリキュラムの単元を構想し、子ども一人一人の気づきに寄り添いながら学校探検の計画を立てたり、気付いたことを出し合う活動を取り入れたりしたことにより、より問題意識が明確になり主体的に学習活動が可能となったと言える。また、単元構想表や時間割表に他教科等との関連を記したことにより、国語科や音楽科、図画工作科、特別活動等と合科的・関連的な指導を行うことができ、授業を効率よく展開することができた。そして、探検した場所にシールを貼るといった遊び的な要素を取り入れたり、教室に探検マップを掲示したりしたことにより、子どもたちが進んで学校探検に出掛けては探検マップで場所や人を確かめる姿が見られ、自発的な活動を展開することができた。さらには、授業形態をねらいや子どもの実態に応じて学年単位・学級単位・グループ単位

等、柔軟に工夫して行ったことで幼児期に慣れ親しんだ活動をふんだん取り入れることができ、安心して小学校生活を過ごしたり、自分たちで生活を創る面白さを味わったりすることが可能となった。これらのことから「スタートカリキュラム」は幼児期から児童期の円滑な接続に一定の効果があり、自立し生活を豊かにしていく教育活動として位置付けることで、入学直後の適応のみならず、自分で考え、判断し、行動することを繰り返していくことがより可能となったと言える。

課題としては、子ども一人一人の気付きがより自覚化できるような環境づくりや教師の指導の工夫が必要である。小学校入門期の子どもにとってノート等に文字を書いて記録することは困難であるため、子ども一人一人のつぶやきや表情、しぐさ等から何を味わっているのか、何を経験しているのかを見取り、一人一人の姿を意味付け、価値づけていくことが必要である。子どもたちと関わる際に教師自身の教師観や子ども観に基づく見方や考え方が少なからず影響している。子どものありのままの姿を受け入れ、肯定的に意味づけ、価値づけていくための子ども見方や考え方については総合的に学ぶ幼児期の教育・保育から大いに学ぶべき点の一つであると言える。

Ⅵ スタートカリキュラムがもたらす効果と今後の方向性

幼児期は「環境を通して行う教育」を基本としており、保育者の意図的・計画的な援助のもと、子どもが自分の力で生活を創っていくことができるよう環境を構成している。「知識及び技能の基礎」「思考力・判断力・表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」の3つの資質・能力が具体的に現れた姿が「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」である。幼稚園教育要領解説等には、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は子どもの自発的な活動としての遊びを通して、一人一人の特性に応じて育っていくものであり、すべての子どもに同じように見られるものではないこと、到達すべき目標でも、個別に取り出されて指導されるものではなく、子どもが発達していく方向を保育者が意識して、それぞれの時期にふさわしい指導を行う際に考慮すべきものであると記されている。小学校の教員にこの「幼児期の終わりまで育ってほしい姿」の正しい理解を促し、スタートカリキュラム及び、その後の教育において大いに幼児期の教育の成果が生かされるように教育活動を工夫していくことが必要である。

幼児教育の質的向上及び小学校教育との円滑な接続について専門的な調査審議を行うため、2021年7月、中央教育審議会初等中等教育分科会の下に「幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会」が設置され、2023年2月にその審議のまとめとして「学びや生活の基盤をつくる幼児教育と小学校教育の接続について～幼保小の協働による架け橋期の教育の充実～」が取りまとめられた。幼保小の架け橋プログラムの実施に関して、「幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き(初版)」と「幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引きの参考資料(初版)」が策定された。この背景には幼稚園教育要領等の3要領・指針の整合性が確保されたことや、幼保小の接続期の連携の手がかりとして「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」策定され、小学校との連携の取組を行っている園が約9割に上るなどの取組が進展しているといった成果がある一方で、幼稚園等の7～9割が小学校との連携に課題意識をもっており、資質・能力をつ

なぐカリキュラムの編成・実施が行われていないことや、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が到達目標と誤解され、連携の手がかりとして十分機能していない等といった課題があることにある。「幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き（初版）」において、架け橋期として義務教育開始前後の5歳児から小学校1年生の2年間は、生涯にわたる学びや生活の基盤をつくるために重要な時期であると記されている。このことからこれまでより一層の幼保小の接続期における保育・教育の質の確保が求められていると言える。今後は、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」をスタートカリキュラムにどう反映させていくかについても検討していく必要がある。

Ⅶ おわりに

スタートカリキュラムの展開に当たっては、幼稚園や保育所、認定こども園等で培った学びの素地を生かすことはもちろん、子どもの期待に応えるものでありたい。

幼児期の教育と児童期の教育とでは教育内容や方法で大きな違いがある。しかし、生きる力を育むことをねらいとし、各時期の発達の特徴を踏まえた上で教育計画を作成し、教師及び保育者が指導・援助に当たる点は共通している。幼児期における遊びを通した総合的な学びから他教科等における学習に円滑に移行し、主体的に自己を発揮しながらより自覚的な学びに向かうことができるようにするために幼児期から児童期への接続期を考慮した教育課程の編成は必要不可欠である。

そのためには幼児期の教育と児童期の教育の相互理解を図り、一層幼稚園・保育所・認定こども園等と小学校との連携が深まることを期待したい。

引用・参考文献

- 1 幼稚園教育要領 文部科学省 2017年
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/you/index.htm
- 2 幼稚園教育要領解説 文部科学省 2018年
- 3 スタートカリキュラムスタートブック 文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センター 2015年
https://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/startcurriculum_mini.pdf
- 4 保育所保育指針 厚生労働省 2017年
- 5 幼保連携型こども園教育・保育要領 内閣府 文部科学省 厚生労働省 2017年
- 6 小学校学習指導要領解説 生活編 文部科学省 2017年
- 7 幼児期から児童期への教育 国立教育政策研究所教育課程研究センター 2005年
- 8 「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告）」 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議 2010年
- 9 「学びや生活の基盤をつくる幼児教育と小学校教育の接続について～幼保小の協働による架け橋期の教育の充実～」中央教育審議会初等中等教育分科会「幼児教育と小学校教育の架

け橋特別委員会」2023年

https://www.mext.go.jp/content/20220307-mxt_youji-1258019_03.pdf

- 10 「幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き（初版）」「幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引きの参考資料（初版）」中央教育審議会初等中等教育分科会「幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会」2023年

https://www.mext.go.jp/content/20220405-mxt_youji-000021702_3.pdf

